



NEWSLETTER

International Lake Environment Committee

＝財団法人 国際湖沼環境委員会＝

このニュースレターには、英語バージョンもあります。

世界の湖沼の未来のために 若者・子どもの交流を

滋賀県知事 嘉田 由紀子
(前ILEC理事)

国際湖沼環境委員会 (ILEC) の関係者、支援者の皆様には、世界の湖沼環境の保全と賢明な利用に向けた日ごろのご努力に対し、敬意を表したいと思います。

私は、学生時代から滋賀・琵琶湖での環境フィールドワークを続けてきました。その後、琵琶湖研究所の研究者として、湖と人びとのかかわりを社会的に研究するプロジェクトをはじめ、湖岸全域の水利用調査、県内河川流域毎の基礎情報収集とそのデータベース化などを行いました。その歩みが世界湖沼会議の実現につながり、ILECの誕生へと発展してきました。

また、私が勤務していた琵琶湖博物館の設置構想の検討が始まったのは、1984年の第1回世界湖沼会議がきっかけであり、世界湖沼会議は琵琶湖博物館の誕生にもつながっていたのです。そのような経緯から、ILECには格別の親しみを感じています。

2001年から知事に就任するまでの約5年半、ILECの理事を務めていましたので、ILECの活動内容はよく理解しています。

この間、2001年の第9回世界湖沼会議（滋賀での「里帰り会議」）と2005年の第11回（ナイロビ）と最近2回の世界湖沼会議に参加し、マラウイ湖における調査を通してトイレに関する人間の行動と衛生問題について発表しました。また、困難な現実の中で湖と関わり合って生きる若者や子どもたちの交流を手がけました。特に、地球の未来を考えるために、子ども・若者の参加は大切です。

今年は、インド・ジャイプール市で、インド政府環境森林省との共催により第12回世界湖沼会議が開催されると聞いています。昨今の経済発展が著しいインドでは、湖沼の環境悪化も急速に進んでいるようですので、この会議が契機となってインドで湖沼の環境保全の流れが一層定着することを願っています。

また、同会議が南アジアで開かれるのは初めてですが、この地域の湖沼に



特有の課題の解決に向けた一歩が踏み出されることは大変意義深いものといえます。私も是非出席して、本県の施策を情報発信し、琵琶湖からの声を南アジアへ、そして世界に届けたいと思っています。

琵琶湖を守ってきた滋賀県民の取組と志を世界に発信し、滋賀の存在感を高めるとともに、世界の湖沼の環境保全とその未来にできる限り貢献したいと考えており、ILECとともにその歩みを進めていきたいと思っています。

ILECの皆さんには今後とも世界の湖沼環境問題の解決をめざし一層ご活躍をされますことを期待しています。

今号の トピック

- 世界の湖沼の未来のために若者・子どもの交流を
- ILEC第11期〔2007年1月1日～2008年12月31日〕の役員
- 統合的湖沼流域管理 (ILBM) の推進
- 世界湖沼ビジョン行動集の作成
- ILEC科学委員会総会の開催
- ストックホルム・ワールド・ウォーター・ウィークにおけるILECサイドイベント
- こども環境教室を開催
- JICA-環境教育コースを実施
- 湖沼流域マッピング
- アムール川(黒龍江)流域総合的管理プロジェクト
- 世界湖沼データベース・知識ベースの構築
- ILECがチャパラ湖賞を受賞

ILEC第11期〔2007年1月1日～2008年12月31日〕の役員

ILECの寄付行為の規定で、理事・監事は評議員会が、評議員は理事会が選任することになっており、また、顧問は理事会が推薦することになっています。第10期の役員は昨年12月末まででしたので、2006年12月12日の第61回評議員会、12月20日の第67回理事会において、次のとおり新しい役員が決定されました。(敬称省略、順不同)

理 事

(再)	浜 中 裕 徳	慶応義塾大学環境情報学部教授
(再)	内 藤 正 明	滋賀県琵琶湖・環境科学研究センター長
(再)	小 谷 博 哉	元滋賀県理事
(再)	佐々木 高 久	(財)日本国際協力システム理事長
(再)	尾 田 栄 章	NPO法人日本水フォーラム顧問
(再)	松 井 三 郎	京都大学地球環境学大学院地球環境学学教授
(再)	中 村 正 久	滋賀大学環境総合研究センター教授
(再)	川 嶋 宗 継	滋賀大学教育学部教授
(再)	松 下 和 夫	京都大学地球環境学大学院地球環境学学教授
(新)	木 幡 邦 男	独立行政法人国立環境研究所水圏環境研究領域長
(新)	柴 田 いづみ	滋賀県立大学環境科学部教授
(新)	辻 ひとみ	NPO法人びわこ豊穰の郷理事
(新)	中 村 道 也	滋賀県琵琶湖環境部琵琶湖環境政策室長

監 事

(再)	高 田 紘 一	(株)滋賀銀行頭取
(新)	山 本 良 助	滋賀県副出納長

評 議 員

(再)	股 野 景 親	元駐スウェーデン大使
(再)	和 田 英太郎	独立行政法人海洋研究開発機構地球環境フロンティア研究センター生態系変動予測プログラムディレクター
(再)	鈴 木 基 之	放送大学教授
(再)	森 建 司	新江州(株)代表取締役会長
(再)	山 田 淳	立命館大学理工学部教授
(再)	竹 村 公太郎	(財)リバーフロント整備センター理事長
(再)	堀 越 昌 子	滋賀大学教育学部教授
(再)	中 村 玲 子	ラムサールセンター事務局長
(再)	津 野 洋	京都大学工学部教授
(再)	竺 文 彦	龍谷大学理工学部教授
(再)	パー・バックケン	UNEP国際環境技術センター所長
(再)	伊 藤 潔	滋賀県琵琶湖環境部長
(新)	仁 井 正 夫	独立行政法人国立環境研究所理事

顧 問

(再)	近 藤 次 郎	東京大学名誉教授
(再)	山 崎 圭	前ILEC理事長
(再)	吉 良 龍 夫	前ILEC副理事長
(再)	橋 本 道 夫	元ILEC副理事長

統合的湖沼流域管理 (ILBM) の推進

湖沼とその流域の管理において「良きガバナンス」を実現し、世界中の湖沼で持続可能な利用を推し進めるために、ILECが中心となって提唱した統合的湖沼流域管理 (Integrated Lake Basin Management=ILBM) の枠組みについて、世界に発信して普及させるとともに、現実の湖沼流域管理に役立てるために、次のような取組を進めています。

(普及の取組)

昨年、ケニアのナイロビで開催した第11回世界湖沼会議で発表した後、第4回世界水フォーラム (メキシコシティ、2006年3月) やワールド・ウォーター・ウィーク (ストックホルム、2006年8月) など機会あるごとに周知を図ってきました。

特に、第4回世界水フォーラムで日本政府が発表した「水と衛生に関する拡大パートナーシップ・イニシアティブ (WASABI)」において、日本のイニシ

アティブの一例としてILBMが紹介されたことは1つの大きな前進でした。

(国等との連携)

日本の、より高次の環境イニシアティブにILBMを位置付けていただくために、政府や国際援助機関との連携を進めています。

① ILBM推進検討会

ILBMを日本の国際環境協力の柱として打ち出す方策を検討するために、竹本和彦氏 (環境省水・大気環境局長) を座長に、環境省、国際協力機構、国際協力銀行の担当者の参画を得て、2006年6月に検討会を立ち上げました。

本年度内に一定の結論を導き出す予定で、精力的に検討を進めています。

② ILBM報告書の概要版、「手引書」の作成

ILBMの枠組みの本質と重要性、有用性を各国の政策決定者などに一

目で理解してもらえるような概要版 (パンフレット) と、ILBMの考え方の背景や関連事項の説明を含めて、分かりやすく解説する「手引書」の作成を計画しており、環境省のご支援が得られるように働きかけています。

③ 円借款事業の事後評価

国際協力銀行がインド・ボパール湖で進めてきた円借款によるプロジェクト (ボパール湖保全・管理事業) の事後評価に当たって、ILBMの観点からの評価を含めて実施することについて、本委員会と国際協力銀行との間で合意し、中村正久科学委員 (理事、滋賀大学教授) を中心に昨年11月から現地調査を実施しました。

現実の湖沼にILBMの枠組みを適用する最初の機会であり、また来年のインドでの世界湖沼会議につながる成果が得られるものと期待しています。

世界湖沼ビジョン行動集の作成

世界湖沼ビジョン行動集は2003年3月に第3回世界水フォーラムで発表した世界湖沼ビジョンのフォローアップとして、世界各地の湖沼管理事例を広く知らせることによって持続的な

湖沼管理の実施を支援しようとするものです。このプロジェクトはケニアのナイロビで開催した第11回世界湖沼会議の場で発表しました。

メキシコで開催された第4回世界水フォーラムにおいて、世界湖沼ビジョン行動集作成委員会を設立した後、委員会のメンバーやリビング・レイクスなどのパートナーの支援のもとで事例報告を募りました。現在までに有益な情報や経験に富んだ28のレポートが19カ国から寄せられました。これらのレポートは現在、ILEC事務局と作成委員会委員長であるラスト教授によってレビューが進んでいます。ILECは、2006年11月30日から12月2日にかけて5つの地域 (アジア・太平洋、ヨーロッパ、アフリカ、北アメリカ、中南米) 代表の委員を招いて作業部会を開催し、これらのレポートのまとめを行い、その結果に基づいて世界湖沼ビジョンと7つの原則の更なる普及を促進するための教訓や提言を取りまとめる予定です。レポートは2007年の3月中に印刷を終了し、同年10月~11月にインドで開催する第12回世界湖沼会議で配布する予定です。



ILECでの作成部会

ILEC科学委員会総会の開催

ストックホルム・ワールド・ウォーター・ウィーク開催期間の前後、2006年8月20日と25日に、ストックホルムにおいてILEC科学委員会総会が

開催されました。今回の主な議題は、科学委員会の次の任期に向けた再編成、ジャーナル誌Lakes & Reservoirs: Research and Managementの編集組織と編集過程の効率化でした。

会総会の協議を経て、次期科学委員会および役員会の委員構成案が決定しました。(新しい科学委員会および役員会の構成委員については、次号で紹介いたします。)



科学委員会総会 (ストックホルム)

現在の科学委員の任期が2007年3月末で終了するため、ILEC事務局では、各委員から就任継続の意向確認と新たな科学委員の推薦の集約作業を2006年1月から進めてきました。その結果をもとに行った今回の科学委員

また、科学委員会の委員を中心に執筆がなされているILECのジャーナル誌Lakes & Reservoir (ブラックウェル・パブリッシング社発行)の編集組織とその過程における問題の改善方法についても論議されました。学術界での重要度や影響度を上げることを目指しているILECとしては克服すべき課題もあり、今後も事務局、科学委員、出版社と協議を進めていく予定です。

ストックホルム・ワールド・ウォーター・ウィークにおけるILECサイドイベント —第12回世界湖沼会議に向けて—

ストックホルム・ワールド・ウォーター・ウィークの開催期間中の2006年8月24日、ILECは“世界湖沼会議と統合的湖沼流域管理における次のステップ”と題して独自のサイドイベントを開催しました。

今回のサイドイベントは次の三点を目的として進めました。まず、現在進行中の研究活動やプロジェクトについて発表し、現状を把握すること。それらの活動成果や教訓を活かし、そこで見出された課題をどのように克服するかについて議論し、意見集約すること。そして、その意見や提案を湖沼流域管理に携わる者を中心に世界的なレベルで議論し前進させるための好機が、インド・ジャイプールでの第12回世界湖沼会議であるという共通認識を参加者間において持つことです。

サイドイベントでは、ILEC浜中理事長の開会挨拶に続き、第12回世界湖沼会議に向けたインド政府環境森林大臣のメッセージが、次期ILEC科学委員となるモハン・コダカール氏(インド水生生物学会 (IAAB) 事務局

長)によって代読されました。

その後、2005年にケニアのナイロビで開催した第11回世界湖沼会議の成果と次に向けた課題をILEC事務局より発表しました。次いで、ILEC科学委員のウォルター・ラスト教授から世界湖沼ビジョンと湖沼流域管理の次のステップについての報告があり、同じく科学委員のニック・アラジン教授からは北アラル海の生態系の改善に関する報告がありました。ILEC研究員のトーマス・バラートルからは、GEF-LBMIのフォローアップとして行っている湖沼流域のマッピングとGIS(地理情報システム)の活用について、ラグナ湖開発公社(LLDA)のサントスーボルハ氏からは湖沼流域管理とカーボン・トレーディングについての発表がありました。参加者からも興味深い質問や、過去の経験や教訓に基づき、第12回世界湖沼会議のセッション構成に



ILECサイドイベント (ストックホルム)

有効と思われる具体的な提案が寄せられました。さらに次期ILEC科学委員となるブラジルのサンドラ・アゼヴェド教授からは、2007年8月にブラジルで開催予定の国際有毒シアノバクテリア(アオコ)会議に関する情報提供がありました。

ILEC事務局では、このストックホルムでのイベントで出された意見や提案を、インドでの第12回世界湖沼会議の今後の準備に活かしたいと考えています。

第12回世界湖沼会議についての情報は、公式ホームページ (<http://www.taal2007.org/>) をご覧ください。今後、新しい情報は順次ILECのホームページにおける世界湖沼会議のコーナー (<http://www.ilec.or.jp/jp/wlc/index.htm>) にも掲載する予定です。

こども環境教室を開催

「こども環境教室」は、平和堂財団（滋賀県彦根市）の助成を受け、夏休み期間中に実施していますが、4回目となる今年度は、8月7日(月)から9日(水)の3日間にわたって開催しました。

参加対象は、滋賀県内の小学高学年生（4～6年）で、今回は、23名（草津市12名、大津市10名、東近江市1名）と多くの小学生が参加しました。

プログラムは、昨年度と同様、琵琶湖に流れる川の上流と中流、内湖での体験学習等を通じて、子どもたちが琵琶湖流域を中心に、環境について考える力を養うことを目的として実施しました。

初日は、滋賀県の甲賀県事務所の協力を得て、甲賀市の「高間水辺の森」で、水源涵養の場として重要な役割を担っている森がどのようにして水を育てているのかについて学びました。その際、現在多くの森の手入れが進んでいないために森が森としての役割を果たせていないことの説明を受け、間伐作業を体験するとともに、伐採した木を使用した“キーホルダーかけ”を作りました。



「目田川」での自然観測

2日目は、NPO法人びわこ豊穰の郷（守山市）の協力を得て、守山市内の住宅地を流れる「目田川」で自然観察を行いました。水辺の昆虫や動植物観察、魚釣りなどにより、身近な川にもいろいろな生物が生息していることを知り、川の保全の大切さを学びました。

最終日は、ILECの近くにある「津田江内湖」で外来魚捕獲専用のエリを見学しました。実際に網にかかっている

魚を観察し、琵琶湖の魚と外来魚について地元の漁師に話を聞き、当日捕獲したブラックバスのから揚げを試食しました。午後には滋賀大学教育学部の川嶋教授を迎えて、身近な材料を使用したリンの検出実験を行い、世界の湖と琵琶湖の問題について学習しました。その後、草津市内で環境保護活動をしている「伯母Q五郎」に参加している小学生による活動報告を聞きました。

JICA-環境教育コースを実施

ILECでは、独立行政法人国際協力機構（JICA）の委託を受けて、2000年度から「JICA-環境教育コース」を実施しており、今年度は、9月4日(月)から10月19日(木)までの期間に、中国（2

名）、コスタリカ、コートジボアール、エジプト、イラン、マレーシア、チュニジア、ベネズエラからの9名の参加のもと実施しました。これまでの7回の研修修了者は、29カ国、57名にのぼります。



滋賀大学市川助教授のワークショップ

地球規模の環境問題に加えて、森林破壊、水質汚染、廃棄物など発展途上国において特に深刻な環境問題を長期的に解決していく必要に迫られています。そのため手段として、特に次世代を担う子供達への環境教育は極めて重要です。しかしな

がら途上国においては、環境教育の指導者育成に携わっている人は、数においても質においても極めて限られているので、その養成のための支援が大変重要となっています。

このことを背景に、研修では、講義、視察、演習を通して、特に水環境を中心とした環境教育のノウハウを学び、最終的に研修生は、帰国後に各国において実施する環境教育のアクションプランを作成しています。

研修は、研修協力機関である滋賀大学教育学部を中心に、滋賀大学経済学部、滋賀県立大学環境科学部などから多彩な講師を招いて実施しており、琵琶湖博物館での演習、東京での実習、滋賀大附属小・中学校の訪問など、研修生が自ら体験し、環境教育を考えるという実践的活動も多く取り入れています。

湖沼流域マッピング

バラトール・トーマス (ILEC研究員)

多くの読者の方は、湖沼流域管理 (LBMI) プロジェクトが最近完了したことはご存知と思います。この記事は、ILECにおいて独自にどのように流域地図の作成を行ったかと、その後の活動についてのお話です。

湖沼流域地図はどこ？

湖沼は流域と密接な関係があることは明らかです。これは長い間陸水学者にはよく知られたことですが、今では水資源管理者にもますます受け入れられつつあり、LBMIプロジェクトの議論の中でも、流域の重要性は頻繁に出ていました。

ですから、28のLBMI対象湖沼のブリーフで、流域地図を含んでいるものが半分にも満たなかったことは、私にとって非常に驚きであり、同時にILECにとっても問題でした。(最終的に完成したブリーフは<http://www.ilec.or.jp/eg/lbmi/index.htm>をご覧ください)。

いくつかのブリーフ、例えばシャンプレン湖のものなどは、専門化が作った地図が含まれていましたし、その他のブリーフでも簡素ではあるけれども、ブリーフで述べられている内容は十分に伝えているものでした。

しかし、残念ながら、多くのブリーフには流域地図がまったく含まれていないか、もっと悪いケースでは(あくまでも個人的な見解ですが)、湖そのものの地図しか入っておらず、本文の内容から乖離しており、湖の流域について述べているブリーフの本文内容を支えるための地図としての働きを成さないものでした。

検索開始

考えが甘かったかもしれませんが、私は流域地図は世界中のどの湖についても、特に自分たちが対象としているような大きな湖については当然存在するものだと期待していました。だから、とにかく既にどこかに存在するそれらの流域地図を見つけ出しさえすればよいのだと考えていました。

ところが、それを見つけ出すことが非常に難しいものでした。最初は、ブリーフの各筆者に再度、流域地図を含めて書いてくれるよう頼みました。しかし、筆者自身も流域地図を含めたいという思いは持っていたけれども、地図は持っていないということが分かりました。そこで文献やインターネットサイトで検索した結果、役立ちそうな地図をいくつか見つけることはできました。しかしながら、それらの地図はそれぞれ多種多様な目的で作成されたもので等しく比較できるものではなく、信頼性や正確さに欠けていました。

そこで、我々は地図作成の経験を持つ機関と連絡をとり、琵琶湖を例にサンプル・マップを用意してくれるよう依頼しました。しかし出来上がってきた地図を目にした時、単に最新鋭のソフトウェア、データベースと技術だけでは、一つの湖沼流域の詳細な情報を反映させた地図を自動的に作成することはできない、各湖のいろんな特徴や地元ならではの情報なしには、正確な地図を作成することはできないということに気づきました。

ちゃんとしたいなら… …自分でやれ！

そうなる必死でした。プロジェクトの締め切りが近づいていましたが、地図はできていませんでした。半ば冗談気味に谷川さん (ILECのグラフィックデザイナー) に自分たちの手で地図作成を試みることを提案しました。まず、手元にあったパイロットが使用する地形図 (ONCやTPCチャート) のうちの1つ (池湖流域のもの) を窓ガラスに貼り付けその上から白紙のトレーシング・ペーパーを重ね、稜線を

なぞり描きました。その後、アドビのフォトショップやイラストレーターを駆使し、稜線だけの地図に、河川・都市などの情報を載せていく作業を行いました。

我々は膨大な数のドラフトをはじめにこなし、最終的には、統一された28のプロジェクト対象湖沼の流域地図を完成させることができました。

製図大賞を受賞するものとは違いますが、それらの地図には、本来の目的どおり、湖沼だけでなく各流域内にある河川や都市、そして国際的および国内的な管轄区域が一貫した方式で示されていました。

「過程」対「成果物」

この地図作成の試みの核心は当然ながら地図を作成することであり、最大の教訓は、先に述べたような何かを創り出すという(恐ろしくもあり元気の出るものでもある)だけでなく、各湖沼とその流域についてよく知るということができたことでした。

私には、湖は人みたいなものと思えるのです。それぞれが異なっていて、大きいものもあれば小さいものもあり、美しいものもあればそうでないものもあります。深いもの、そして浅いもの、なんと多いことか！湖を知ることとは、まるで新しい友人と出会うようなものです。ですから、湖沼流域地図を作成することは、言ってみれば自分の友人のポートレイトを作成するようなものです。よく観察、調査し、その外郭を描きながら対話をする。そのような作業をしている間に、それまでに知らなかったことが見えてくるのです。それは対象物により密接になっていく過程であり、私個人的にはLBMIプロジェクトにおいて最もやりがいの

あったと思える経験でした。

GISがどんどん好きになる

湖沼流域地図の作成はたいへん面白いものとなり、LBMIプロジェクトが終了して以来、私が取り組んでいた作業中で唯一、知的好奇心を掻き立てるものとなりました。いくぶんかゆったりとしたプロジェクト終了後の期間を使って、ArcGISのような地理情報システム（GIS）のソフトウェアをいかに活用できるかを学びました。

基本的な方法だけに、多くの人がLBMIプロジェクトの湖沼流域地図を作成する際、我々がGISを使用しなかったことに驚かれました。私たちはトレーシング・ペーパーでの手描き、アドビ・イラストレーターという2つの“原始的な”方法を選びました。それは次のような理由からです。まずGIS（少なくともArcGIS）の学習曲線はあまりに急勾配で上昇するものでしたし、当初の我々の目的として、そこまでは必要としていませんでした。我々はあくまでも見てもらえる地図のデザインをしていたのであり、そこから得られる情報は十分なものでした。

しかし、今必要なのは分析ツールとしての地図なのです。ただ眺めるため

のものではなく、探索したり分析したりすることにも使用される地図が必要なのです。私の全体的な目標としては、より正確で視覚的にも美しい流域地図を作成することのほかに、ILECが取り組んでいる政策問題に分析力に富んだ厳密さを加えることです。

流域地図の真の価値は、人口、降水量、言語などの情報を盛り込んで初めて明らかなものとなります。もし空間的な情報を正確に制御し処理することができなければ、何も確かなことは言えないでしょう。同じことが投影や縮尺などの製図における問題でもあてはまります。GISのような正式なシステムを抜きに、我々はこうした問題を扱うことはできません。

ArcGISを学ぶことはたいへんな挑戦で、正直頭にくることも多くありました。それはまるで野生馬のようなものでした。まず、どのように進めていくのかまったく分かりません。一度乗り出すことができても途中で投げ出されてしまいます。やっとのことでだいたい慣れ、その潜在性が見えてくるまではこれの繰り返しです。少しずつ進むこともあれば、大幅に前進することもあります。どうやってジャンプするのかを覚えたら、次は泳ぐ能力さえもっていることに気づくかもしれません

...

我々のもっていた利点としては、我々は自分たちの欲しいものが分かっていたし、その意味においては、このソフトウェアは（その目的までの過程を）突き進むというよりは、可能にしてくれました。

皆様へのお願い

どの湖沼流域地図にとって重要なのは、その地域をよく知る方からの情報を盛り込んでいくことです。我々の地図の試作においても、これはずっと行ってきたことでもあり、今後もその継続と拡大をしていくつもりです。

我々が作成した地図をご覧になりたい方は、<http://www.ilec.or.jp/maps.htm> にアクセスしてみてください。

また、もしご自身が関心を持っておられる湖沼流域の地図に取り組むことを希望される方がおられましたら、ぜひ私どもにお知らせください。こちらで案を作成し、共同で詳細事項について作業を進めさせていただきますので、map@ilec.or.jpまでご一報ください。人間でも湖でも、いつでも新しい友人をつくっていくことに関心をよせています。

アムール川（黒龍江）流域統合的管理プロジェクト

ILECはUNEP北京事務所が執行機関であるGEFプロジェクト“アムール川（黒龍江）流域統合的管理プロジェクト”に参加しています。このプロジェクトは現在、本プロジェクトへの準備段階にあり、本プロジェクトを提案するために、（1）アムール川流域および近接する海岸地域に関する越境診断分析報告書（TDA）を作成し、併せて（2）シンカイ湖（ロシア名：ハンカ湖）に関する戦略的行動計画（SAP）を作成し、中国・ロシア2国間活動の準備を進めることを目指しています。2006年5月8日、9日の2日にわたって第1回の運営委員会が北京で開催され、プロジェクトがスタートしました。ILECはアドバイザーとしてプロジェクトに参加し、

特に、これまでに蓄積した知識や経験を活かしてシンカイ湖のSAP作成に協力することになっています。ちなみにシンカイ湖はILECが実施したGEF中規模プロジェクト“湖沼流域管理プロジェクト”の28の対象湖沼の1つです。



第1回運営委員会参加者（北京）

世界湖沼データベース・知識ベースの構築

いまILECでは、「世界湖沼データベース・知識ベース」の構築作業に取り組んでいます。

現在の世界湖沼データベースは、データが古いという点と、湖沼に関する地理的、物理化学的データが他の情報と関連づけられることなく存在しているという点で利用価値の低下が指摘されてきました。そこで、これらの弱点を克服するとともに、将来的には、「知識ベース」とのつながりを有し、統合的湖沼流域管理（ILBM）の枠組みに即した情報システムの構築を目指しています。一昨年度から総合地球環境学研究所の協力を得て、これまでに検索エンジンの開発などを終え、本年度はデータ検索システムづくりに取り組んでいます。

*「世界湖沼データベース・知識ベース」では、例えば、こんなことができます。

●湖沼保全の「制度」はどうなっているかな？

→「制度」で検索すると、各種論文の「制度」に関する記述が見られると同時に、各湖沼での保全制度（法的、経済的、慣習的など）が表示され、参考にできる。また、各湖沼の水質等の環境状況と照らし合わせれば、各制度の成果もある程度推し量ることもできる。

このシステムは、湖沼流域管理に関する幅広い情報を、いろいろな切り口から提供できることを特徴としています。様々な角度からの情報を提供できるということは、同じ情報でも各々の分野の言葉に「翻訳」できるということであり、幅広い分野の人々、あるいは利害が異なる人達が、湖沼の流域管理に関して同じ土俵で議論することが可能になると思われます。

ILECがチャパラ湖賞を受賞

ILECはメキシコ最大の湖であるチャパラ湖の保全に貢献した個人、団体に贈られる“チャパラ湖賞”を受賞しました。授賞式は2006年3月21日にチャパラ湖畔の大講堂で行なわれ、ILECを代表してILEC理事で科学委員でもある京都大学松井三郎教授がレイクサイド委員会から記念の盾を受賞しました。

ILECは、協力の一環として地元のNGO、Corazon de la Tierraと共同で2006年11月1日～4日までチャパラ湖の再生に向けた専門家会議と市民会合を開催しました。Corazon de la Tierraはチャパラ湖の保全とその豊かな生物系



記念の盾

の保全のためにCondiro-Canales山系で持続的な開発プログラムを進めています。



松井教授と地元の人々（授賞式後）



INTERNATIONAL LAKE ENVIRONMENT COMMITTEE

—事務局—

〒525-0001 滋賀県草津市下物町 1091 (財)国際湖沼環境委員会
TEL. 077-568-4567 / FAX. 077-568-4568 E-mail : info@ilec.or.jp